

令和元年6月25日現在

機関番号：30108

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02414

研究課題名（和文）1920-30年代における日韓文化交流に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive research on Japan-Korea cultural exchange in the 1920s-30s

研究代表者

梶谷 崇（KAJIYA, TAKASHI）

北海道科学大学・未来デザイン学部・教授

研究者番号：10405657

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間中は、札幌圏の研究協力者とともに月に一度の頻度で、本研究課題に関する研究会を開催し、研究を進めた。2016年には韓国へ出張調査をし、文学館、資料館等を訪問し、20-30年代の韓国の文学者に関する情報資料収集を行なった。2019年3月に開催された日本比較文学会北海道支部研究会でシンポジウム「日韓芸術の媒介者たち」において、研究期間の成果をまとめ、柳宗悦、柳兼子、南宮璧、洪蘭坡、村山知義、崔承喜らの活動や思想について検討し、近代文化が日本と朝鮮の文化が横断的に展開されたことと、そこで彼らがその文化活動の媒介となったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は近代日韓の芸術文化交流のあり方について、日韓双方の研究者が共同で行なった点に大きな意義があると考えられる。とりわけ従来型の支配-被支配の関係性に焦点が当てられる近代日韓文化史の研究分野において、意識的にそれを超える観点から分析を行なった。その結果、両国間を往来しながら文化活動を行なった文化人や芸術家たちの活動が、決して近代日韓の政治的関係性のみにとらわれるわけではなく、そこから脱した視点や感性を持って行われたことの一部を明らかにすることができた。研究成果は最終年度にシンポジウムで報告したが、それを受けてこの成果を発展させる形で、2019年度に全国大会でのシンポジウムが企画されている。

研究成果の概要（英文）：During the research period, we held a study group on this research subject with a research collaborator in the Sapporo area at a frequency of once a month to advance research. In 2016, Our study group conducted a research trip to Korea, visited literary museums, libraries, etc., and collected information materials on Korean literary persons and artists in the 1920-30s. We summarized the results of our research at the symposium "Intermediaries of Japanese-Korean Art" at the Hokkaido Branch Study Group of the Japan Comparative Literature Association held in March 2019. We examined the activities and ideas of Yanagi Muneyoshi, Yanagi Kaneko, Nam Gungbyeok, Hong Nanpa, Murayama Tomoyoshi, and Choe Seunghui and others, and that they acted as mediums for the cultural activities developed across Japan and Korea.

研究分野：比較文学

キーワード：日韓文化 柳宗悦 柳兼子 南宮璧 洪蘭坡 村山知義 崔承喜

1. 研究開始当初の背景

(1) 1920年代から30年代にかけ、柳宗悦は、朝鮮人知識人らとの交流を通じて、朝鮮工藝に対する理解を深め、それはやがて朝鮮民族美術館設立や民藝運動などの社会的実践へとつながっていった。柳の活動は工藝や朝鮮に対する新たな言説を生み出し、それは今なお日韓両国の文化にとって大きな思想的影響力を持っている。現在においても日韓比較文学の領域においては柳の思想や言説、実践の価値や時代的限界に対する研究が続けられている。

(2) 柳宗悦と直接関わりのあった朝鮮人知識人との交流については多くの研究の蓄積があるが、同時代の日朝文化交流との比較検討はあまりなされてきていない。特に、柳はその活動が文学、思想、工藝、美術、音楽など多ジャンルに渡っており、網羅的に把握することは容易ではない。本研究テーマは以上のような研究状況を踏まえながら、日韓の共同研究で様々なジャンルの文化交流のあり方を比較しながら柳宗悦や同時代の日朝の文化人たちの思想や実践を比較検討するものである。

2. 研究の目的

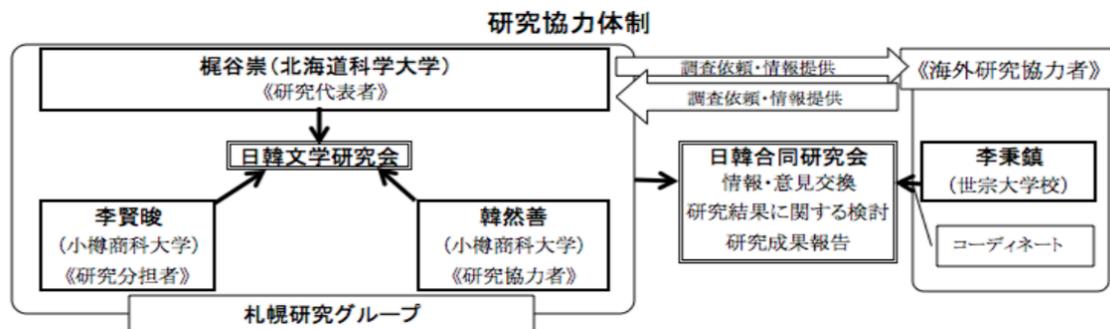
(1) これまで日韓共同で行ってきた柳宗悦に関する研究を継承・発展させながら、1920-30年代に日本と朝鮮において横断的に活動した両国のさまざまな文化人を比較参照項とすることで、柳宗悦の文化的実践を整理・分析し、柳宗悦の思想的特質や日朝の文化交流において果たした役割について考察をする。

(2) 日朝間において展開された朝鮮の舞踊家崔承喜や日本の劇作家村山知義、柳宗悦の妻であり声楽家である柳兼子や朝鮮の音楽家洪蘭坡など、多様な文化ジャンルの芸術家や文化人の文化実践を比較文化的観点から分析し、1920-30年代の日韓文化交流の有り様を総体的に明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者梶谷崇、共同研究者李賢峻、研究協力者韓然善の3名にて、札幌・小樽地域を拠点として1-2ヶ月に1度程度の頻度で日韓文学研究会を実施し、各自の研究進捗状況を報告、情報共有を図った。また在ソウルの海外共同研究者である李秉鎮にも協力を仰ぎ、情報提供を依頼、またソウル出張時には合同で研究会を行なった。

(2) また、ソウルへの調査旅行を行い、図書館（国立中央図書館やソウル大学図書館）、私設文学館、資料館等を訪問し、関連資料の調査、収集活動を行なった。



4. 研究成果

2018年7月に小樽商科大学で開催された日本近代文学会北海道大会において、[特別企画]《日韓芸術の媒介者たち—近代における文化人の活動を通して—》を企画、実施した。この企画は、3年間にわたる本研究テーマの中間報告として位置付けられる。

(1) 海外共同研究者である李秉鎮は〈講演〉という位置付けで、同氏の近年の柳宗悦研究の成果について発表を行なった。民藝運動を日韓近代の歴史上に位置付けた上で、ウィリアム・モリスらのアーツアンドクラフツ運動との比較検討を行い、それらが近代に対して投げかけた新たな価値について発表を行なった。洋の東西を超越した普遍的な美を希求した柳宗悦の民藝運動は、そのような普遍的価値観として朝鮮と日本を横断的に展開されたのであり、柳宗悦はその意味で日朝の媒介者として機能したことを明らかにした。

(2) 梶谷崇は、20年代朝鮮で展開された西洋音楽受容について検討を行なった。京城で行われた声楽家柳兼子の音楽会やバイオリニスト洪蘭坡の演奏会等について、彼ら/彼女らの活動は、朝鮮社会に西洋文化の紹介にとどまらず、その受容の仕方（聞き方や理解の仕方、音楽会への参加の様式など）まで移入するものであったことを明らかにした。例えば、洪蘭坡は西洋音楽を作曲家の思想や精神性を読み取るべきものであり、それを受容することは崇高なものであるという聞き方の様式まで西洋から朝鮮社会に移入した。あるいは閔泰瑗が柳兼子の音楽会をモチーフに描いた小説「音楽会」（1921）や、洪蘭坡による小説などの描写から、音楽会が新し

い男女の出会いの場として機能していた点などが確認でき、洋楽は朝鮮社会の特に新女性を含め新しい世代のライフスタイルに大きな影響を与えていたことを指摘した。

(3) 韓然善は、劇作家村山知義の朝鮮人留学生たちとの交流について検討を行なった。村山は30年代に『春香伝』の脚本に関わり、朝鮮文化との深い関係性が指摘されているが、韓は村山の演劇活動のについて詳細に調査・整理・紹介し、村山と朝鮮人留学生たちとの交流は20年代後半から活発に行われていたことを実証的に明らかにした。村山はプロレタリア演劇運動に関わる中で朝鮮の留学生たちと活動を共にしていくが、その過程のなかで日本／朝鮮、帝国／植民地という固定化された関係に収斂されないような多様な交流を行なっていく。村山は朝鮮人や朝鮮文化から様々な文化的影響を受けながら、文化実践を行なっていたのであり、その中で村山は「朝鮮的なもの」を追求するようになり、『春香伝』の舞台化や朝鮮語劇への挑戦へとつながっていくのである。

(4) 李賢峻は、朝鮮の舞踊家崔承喜の映画を分析しながら、崔承喜のイメージがどのように形成され消費されていたのか検討した。崔承喜は1935年に封切られた『百万人の合唱』においてスクリーンデビューを果たし、ついで『半島の舞姫』(1936)において主演を果たす。自伝的内容であるこの映画を通して崔承喜は舞踊の枠を越えて、日本の大衆的スターになっていった。崔承喜は植民地朝鮮出身の舞踊家として見られる一方で、ファッションや手足の長い西洋的な身体や、彼女の恋愛や結婚に至るまでの価値観なども含め、当時の日朝のメディアにおいてその「近代性」が強調された。崔承喜の「朝鮮的」な側面と帝国／植民地という枠組みを超越するような「近代」的な側面が明らかになった。

(5) 梶谷崇は本研究テーマと関連して立原正秋の文化的アイデンティティの問題について考察し、2017年10月、2018年10月の2度にわたり学会発表を行なった。

朝鮮半島出身の小説家立原正秋(1926-1980)は、父母ともに朝鮮人であったが、その出自を両親ともに日朝混血であり、自らも日朝混血であると称して戦後日本で作家活動を行なった人物である。1920～30年代に朝鮮半島および日本(横須賀)において幼少期を過ごして自己形成をした立原にとって、自らの文化的バックグラウンドを日本、朝鮮いずれに求めるのか、というアイデンティティは生涯の問題であった。立原の文化的アイデンティティはどのような形をとることになったのか、立原が40歳台後半から50歳にかけて書かれた自伝的小説『冬のかたみに』の「幼年時代」「少年時代」を主に分析を行なった。同作品においては主人公東重行は日朝混血であるが故に、周囲と度々摩擦を引き起こし、孤独で殺伐とした少年時代を送っている。その重行を精神的に支えているのは30歳半ばで自裁した父の存在であり、父との思い出である。この中で特に注目したのは、重行にとっての李朝磁器の見方である。重行は李朝の姿の中に父の面影を見、その美は日本や朝鮮を超えるものとして描かれている。焼き物に精神性を見る態度は柳宗悦や民藝運動にも連なるものである。また自らを混血と名乗り、日本人として生きた立原の自らの出自に対する向き合い方を示すものと考えられる。

2度の発表を通して、以上の内容を報告した。

(6) 研究期間外になるが、本研究テーマのまとめとして日本比較文学会第81回全国大会(2019年6月・北海道大学)において、シンポジウム「近代日朝文化交流の再検討——近代と伝統、都市と地方」を企画・実施する。このシンポジウムには報告者として梶谷、李、韓の研究グループメンバーに加え福岡大学の柳忠熙氏を、また討論時にはコメンテーターとして九州大学の波瀾剛氏にも登壇いただく。3年間の本研究テーマのまとめとして位置付けられるものであり、当日の討論をふまえ、成果を今後、同学会誌へと投稿していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 8 件)

- ① 梶谷崇、立原正秋と文化的アイデンティティ、日本文芸研究会・東アジア日本学会・東北アジア文化学会共同開催 2017年度秋季連合国際学術大会(国際学会)、2017年10月、東亜大学校(釜山)
- ② 梶谷崇、照応する有島武郎と柳宗悦——ヨーロッパ中世宗教への理解を通して、有島武郎研究会第62回全国大会、2017年12月、新宿区立新宿歴史博物館
- ③ 李秉鎭、思想家としての柳宗悦を読む—近代の超克と民衆工芸(民藝)運動—(〔特別企画〕《日韓芸術の媒介者たち—近代における文化人の活動を通して—》)、2018年度日本比較文学会北海道大会、2018年7月、小樽商科大学
- ④ 梶谷崇、行為としての音楽会—1920年代朝鮮における西洋音楽受容—(〔特別企画〕《日韓芸術の媒介者たち—近代における文化人の活動を通して—》)、2018年度日本比較文学会北海道大会、2018年7月、小樽商科大学

⑤ 韓然善、村山知義と朝鮮の演劇人—1920年代後半から1930年代前半にかけて—（〔特別企画〕《日韓芸術の媒介者たち—近代における文化人の活動を通して—》）、2018年度日本比較文学会北海道大会、2018年7月、小樽商科大学

⑥ 李賢峻、モダン・ガール崔承喜をうつす—1930年代日朝におけるメディアの中の植民地表象—（〔特別企画〕《日韓芸術の媒介者たち—近代における文化人の活動を通して—》）、2018年度日本比較文学会北海道大会、2018年7月、小樽商科大学

⑦ 梶谷崇、立原正秋『冬のかたみに』試論—自伝的小説と作家像の創出について、招待有り、韓国日本語文学会第51回国際学術大会（国際学会）、2018年10月、全北大学校（全州）

⑧ 梶谷崇、柳宗悦・民藝思想から考える日韓文化交流～韓国と日本を結ぶデザイン思想、招待あり、2018年度大学人文力量強化日本地域専門家招請講演、2018年11月、忠南大学校（大田）〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：李賢峻

ローマ字氏名：(LEE, Hyunjun)

所属研究機関名：小樽商科大学

部局名：言語センター

職名：准教授

研究者番号（8桁）：40708369

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：韓然善

ローマ字氏名：(HAN, Yeonsun)

研究協力者氏名：李秉鎮

ローマ字氏名：(LEE, Byungjin)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。